

第三部会

アンセルムスにおける affectio について

矢内 義顕

一一一二世紀の修道院神学者たちが、その著作において多用する *affectus* と *affectio* という語は、「霊的な心理学」とも呼ぶべき彼らの靈魂論を理解するうえで、不可欠の概念である。一一世紀のカンタベリーのアンセルムスは、*affectus* と *affectio* を意図的に区別する。*affectus* (愛情) は、友人に対する強烈なまでの友愛を記す『書簡』、個人の熱烈な感情、情緒と信仰・敬虔を見事な文体で表現した『祈禱』『瞑想』で用いられる。これに対して *affectio* は、意志の構造を分析する際に、意志のもつ「傾向性」の意味で用いられる。

アンセルムスは、初期の著作『自由選択について』第九章で、「意志」という語には、魂の内において「何かを欲する力」という意味での「道具」(*instrumentum*)としての意志と「実際に何かを欲する」という意味での「使用・活動」(*usus・opus*)の二つの意味があることを明らかにする。さらに、後期の著作『処女降誕と原罪について』第四章では、この二つの意味に加え、道具としての意志がもつ「傾向性」(*affectiones*)に言及するが、詳しい説明を行わない。彼がこの点について、最も詳しく述べるのは、最後の著作『自由選択と予知、予定および神の恩恵の調和について』の「問題三」第一一一三章である。ものを切断する道具であっても、のこぎりには木を切るため

の適性があり、はさみには紙を切るための適性があるように、それぞれの道具は、使用される目的に応じて、各々の適性 (*aptitudines*) が与えられる。それと同じように、道具としての意志にも適性があり、それをアンセルムスは「傾向性」と呼ぶ。道具としての意志、つまり欲する力としての意志は、それが使用される場合に、やみくもに欲するのではなく、何かある特定のものを欲するようになっており、それを、意志の「適性」「傾向性」と呼び、意志はその「傾向性」に影響されて (*affectum esse*) 何かを欲する、というのである。人は、有益なもの、たとえば、健康を欲し、そのための手段を選択し、実行する。この場合、健康が有益なもの、善であることを提示するのは、人間の魂の内に備わる推理の能力としての理性である。ではなぜ意志はその有益なものを欲するのか。意志には有益なものを欲する傾向性が備わっているからであり、そのように備えたのは、創造者である神である。それゆえ、この有益なもの、「有益性」(*commoditas*) を欲する傾向性は、道具としての意志に不可分に備わっており、この傾向性のゆえに、人は幸福、幸福であることを意志するのである。しかし、アンセルムスは、意志の傾向性として、もう一つ、「正しい」(*rectitudo*)、「義であること」(*iustus esse*) を欲する傾向性があるという。この二種類の傾向性について論じることが、選択の自由、救済論さらには終末論の問題領域に足を踏み入れることになり、本稿の範囲を越えることになる。また、彼は、本書ではついに論じることがなかったが、使用としての意志についても、これを区分していたことが、彼の草稿から知られる。これについて

も、別の機会に論じることにする。ここで確認しておきたいことは、彼が意志の構造を、道具としての意志、傾向性としての意志、そして意志の使用の三つに区分し、さらに、後者の二つについても区分を試みたということである。

アンセルムスは、彼の著作において、もっぱら意志に関わる諸問題を論じたが、意志そのものについて包括的な考察を記す著作を残すことはなかった。しかし、以上の意志に関する考察は、そのための予備的な作業であったと思われる。上述のように、一二世紀の修道院神学者、たとえば、サン＝ティエリのギヨームやリーヴォーのアエルレドゥスは、魂の分析に強い関心を示し、著作を残す。その萌芽は、すでにアンセルムスに見いだすことができる。

マイスター・エックハルトにおける神の言述可能性について

松沢 裕樹

エックハルトは、言語論をその中心テーマとする『出エジプト記註解』において、我々のあらゆる認識は「もの」を感覚的に認識することに端を発し、それによって認識された「表象」は知性認識を通じて、アリストテレスの十個のカテゴリーを頂点とした類と種の体系の中で分類された「概念」となり、我々の「言葉」はするように認識された「もの」の「概念」を指し示すと理解している。

この認識・言語モデルに従えば、感覚認識によって表象化されず、知性認識によって概念化されない神を、「もの」の「概念」を指し示す「言葉」によって言述することは、不可能であ

ると言える。しかし、エックハルトはここで、単に「言葉」による神の言述可能性を否定するのではなく、神はあらゆる「概念」の否定によってのみ語られうるという否定神学的な立場から、神は「否定」という言語機能を用いて言述されうるとみなすのである。この否定神学的な神の言述は、我々の認識と言葉の限界性を否定的に言語化することによって、それに対する神の認識論的超越性を指し示すことを意味している。

エックハルトはまた、否定神学的立場からだけではなく、「一」「真」「善」などの完全性を指し示す「概念」を用いて、神を肯定的に言述することも可能であるとみなしている。しかし、これらの「概念」は、我々の知性による完全性そのものの認識からではなく、そこで完全性が不完全な仕方で分割されている被造物の認識から導かれるのであり、完全性が「認識される仕方 *modus intelligendi*」として不完全であると言える。

そして、被造物における完全性の認識から導き出された「言葉」もまた、完全性そのものを指し示すのではなく、被造物において不完全な仕方である完全性を指し示すのであり、「指示される仕方 *modus significandi*」においても不完全なのである。以上の二つの観点に従って、エックハルトは、不完全な仕方で完全性を指し示す「言葉」によって、神を指し示すことは不適切であり、むしろ、否定神学的な神の言述が適切であると判断するのである。それに対して、完全性を認識し、それを指し示す際の、我々における認識論的な不完全性に着眼点を置くのではなく、ただ「言葉」によって「指示される完全性そのもの *ipsae perfectiones significatae*」だけに着目するならば、